

学生の視点、教員の視線からみる経営情報学部

Viewpoint and Perspective of the School of Management and Information Sciences

新 西 誠 人 *
Makoto SHINNISHI

キーワード：経営情報、学生、教員、母校、開学の精神

Keywords：Management and Information Sciences, Student, academic,
alma mater, spirit of founding a university

1. はじめに

2024年、多摩大学は開学35周年を迎える。筆者は、1994年4月に6期生として多摩大学経営情報学部経営情報学科に入学し、1998年3月に卒業した。そして、卒業から24年たつ2022年4月に多摩大学に専任講師として戻ってきた。本稿では、学生の視点から見た多摩大学経営情報学部と、教員の立場から見た多摩大学経営情報学部について論じ、そこから見える経営情報学について論じていきたい。なお、どうしても個人的な主観が大きい内容を取り扱うため、客観性に欠ける記述があることをご容赦いただきたい。

2. 1994年の社会環境

当時の経済環境を振り返ると、1991年にバブル経済が終息を迎えた一方、1994年は世界に占める日本の国内総生産（GDP）シェアが17.9%とピークを迎えた年である。とはいえ、バブル崩壊から不況感があり、その反動からか、特に政策支援が強い第3次ベンチャーブームが起り始めた時期でもある（小野瀬（2007））。

この1990年代は情報通信技術の普及が顕著であった。総務省（2019）によると1994年の携帯電話の加入者数は約430万件。翌1995年には1000万件を超え約1020万件となる。さらに1996年には約2090万件、1997年には約3150万件と年を重ねるごとに1000万件単位で加入者が増加した時期である。1996年開始のiモードや着メロ、1997年のショートメールが携帯電話の利用を促進した。

また、Windows95が1995年に発売され、一般家庭でのインターネット接続の敷居が下がった。当時、家庭からのインターネット接続は電話回線を介す方式が主流であり、日本電信電話（NTT）は23時から翌朝8時まで、電話料金が定額で使い放題になる「テレホーダイ」を開始。

* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

インターネットが家庭にも広がりつつあった。

この時期、海外でも多くのIT系ベンチャーが創業した。例えば、アマゾンの創業やヤフーのサービス開始は1994年、グーグルのプロジェクト開始は1998年である。

3. 学生からみた多摩大学

多摩大学は「国際性」「学際性」「実際性」を掲げ、当時、象牙の塔と揶揄されていた大学教育に対抗して、実社会で役立つ学問を行う「実学」を掲げていた。経営情報について、日下公人教授（当時）は、「経営情報学は（中略）経済学や商学、経営学などの既存の学問分野と異なる点は、「目的科学」である（後略）。」とし、従来の学問が理論に集中するあまり、実態とかけ離れてしまった一方、経営情報学は「企業活動をより有効に導くため」という目的をもった学問であると1994年入学志願者向けのパンフレットで述べている（多摩大学（1994））。

実際、教員も実務家教員が多く、アカデミックな理論を元にそれぞれの実務から得た知識やノウハウを生き生きと教授する講義が多かった。野田（1991）によると、開学当初の実務家教授予定者は23人中15人と6割を超える。経営情報を軸にさまざまな実務家教員がそろっていた。このような多摩大学で学べる生きた学問は、高校までの勉強が実際に役に立たないのではないかと穿って見ていた筆者にはとても刺激的だった。

筆者が入学した1994年度の学長は、野田一夫氏だった。そして、入学して半年後には任期を終えて中村秀一郎氏に世代交代した。しかし、中村氏は、着任後すぐに病に倒れ、翌年には、グレゴリー・クラーク氏が3代目学長に就任。入試科目から英語をなくすなど、さまざまな改革を行った。

学長の交代はあったが、在学した4年間、多摩大学には野田氏の影響はまだ色濃く残っていた。野田（1991）は、学生を、「授業料を支払った対価として、サービスを受ける消費者」と捉え、日本初の①シラバス②授業評価③退学勧告④休講なしなどを謳っていた。

① シラバスについて

野田（1991）はシラバスについて「これを見れば単位を取れる」と記している。実際、一種の資料集のように、グラフや図表なども多用され授業の内容が詳しく書かれている。そのため、シラバスは電話帳のようにとても厚かった。例えば、平成4年度のシラバスは、1・2年生向け、3・4年生向けの2冊に分かれており、2冊を重ねると6cmほどになる（図1）。



図1 平成4年度のシラバス

② 授業評価について

授業評価は、全期または半期の授業の最終講に近づくと実施される。野田（1991）は、授業評価を教員の評価に用いないことを公言しており、学生として、授業の改善に寄与するためと思って、真剣に良かった点や改善点を記入した記憶がある。

③ 退学勧告について

筆者も友人も退学勧告の対象になったという話を聞かなかったため、その実態については不明である。野田（1991）によると、辞めさせるのが目的ではなく、奮起させるのが目的だったようだ。

④ 休講なし

授業が休講なしで、時間通りに始まることは、高校までと変わらず、当たり前のように感じた。しかし、筆者が別の大学院に行くようになると、休講は当たり前のように行われ、チャイムがなっても教員が現れない授業を受けて、「休講なし」「遅刻なし」は当たり前ではなかったことを感じた。

4. 経営系か情報系か

周りの学生を見てみると、個性的な学生が多かったように思う。特に筆者は、演劇サークルである「サザンクロス」に所属しており、演劇に興味を持つような学生は多かれ少なかれ個性的であるのも影響していたかもしれない。サザンクロス以外の友人でも、自ら起業をする学生や経営者の子供などが多く在学していた。ホームページ作成を事業として起業する先輩もおり、例えば、サザンクロスの先輩が、首相官邸内を写真でウォークスルーできることを摸した首相官邸のバーチャルツアーなどを受注していたのを思い出す（朝日新聞（1996））。

筆者は、入学当初、起業したいと考えて経営系の授業を積極的に履修していた。これは、父が購読していた「日経ビジネス」を中学生の頃から愛読しており、経営に興味があったことも影響している。しかし、1年の春学期の成績を見ると時間をかけて勉強したはずの経営系の授業の評価はそれほど高くない。一方で、情報系の授業については大した勉強もしていなかったが、軒並み良い評価であった。自分は情報系の方が合うのではないかと気づいた瞬間であった。このように、文系ではあるが、経営系と情報系の文理融合の中、どちらかの比重を高めて履修できるのは、「学際性」を掲げた経営情報学部の魅力であろう。

大学内の情報系の環境は、1年生だった1994年は、日本電気のPC9801が情報教室に鎮座していた。翌年の1995年になると、これがMacintoshに変わった。学ぶべき方向性が決まって、自らもパソコンを所有すべく、1年生と2年生の夏休みにバイトでためたお金を握りしめて電気屋で買ったのは、当時出たばかりのRISCプロセッサであるPowerPCを搭載したPower Macintoshである。当初はパソコンに触るのが嬉しくて、レポートを書いたり、絵をかいたりしていたが、これではせっかく買ったマシンの能力を活かし切れない。

そこで、貧乏性の筆者は、汗水流して働いたお金で買ったパソコンの能力を使いきれような用途がないか考えた。そこで見出したのが、3次元コンピュータグラフィックス（3DCG）である。現在では、3DCGは映画さながらのクオリティで、リアルタイムに動き、わずか1フレー

ムの差が争われるゲームでも多用されている。しかし、当時はそんなことは夢のまた夢であった。わずか数10秒の3DCGの動画を作成するだけでも一晩掛かる。そこで、夜中まで3DCGのデータを作成し、作画をコンピュータに命令してから就寝するという生活を送るようになった。

3年生からの専門ゼミは、齋藤裕美（現、彩藤ひろみ）ゼミを迷わず選択した。当時はまだ3DCGには特化していなかったゼミであるが、コンピュータグラフィックス（CG）を行っているということが選択理由である。選抜の結果、晴れてゼミ生となった。

当時の彩藤ゼミのメンバーは個性が強く、自主的に何かやっているという状況であった。ゼミの時間も、何か発表したい人がいれば発表するし、そうでなければCGを作成したり、技術の話をしたりと、決まった活動はなかった。仲間と切磋琢磨しながら、主体的に自分の興味を突き詰めて研鑽できる環境は得るものが大きく、良い時間を過ごしたと今でも感じている。

その後、親しい友人が、ゼミとして正式には認定されていない出原至道先生のところへ出入りしていることを知った。そこでゼミとして開講される前の0期生として出原至道ゼミにも出入りするようになった。

当時も卒業のために卒論は必須ではなかったが、彩藤ひろみゼミでは3DCGのさまざまな方式や表現、将来の展望について調査し、卒論としてまとめた。また、出原至道ゼミではレイトレーシングという3DCGの表現手法の一つをプログラミングし、解説を加えて卒論とした。

実際に役立つという手触り感のある実学を学び、もっと深めたいと思っていたころ、多摩大学の図書館の蔵書棚を眺めて「自分は知らないことがまだまだたくさんある」という問題意識を抱き、大学院進学を志した。

多摩大学には1993年から大学院が設置されていたが、入学するには「実務経験3年以上」という制約があった。そこで、彩藤ひろみ先生や白根禮吉先生のご尽力もあり、他大学の大学院へ進学し、その後企業の研究所などで24年働いた。

5. 教壇に立つ

多摩大学に戻ってみると、筆者が学生当時、教鞭をとっておられた、杉田文章副学長、今泉忠教授、中村有一教授、中村その子教授、彩藤ひろみ教授、出原至道教授が在籍されており、懐かしい再会を果たした。ただし、私のことを記憶していたのは、彩藤ひろみ教授と出原至道教授だけである。筆者は、印象に残らないほど、周りの学生の個性が強かったのだろう。

現在は、「情報系」の教員としてコンピュータの使い方の初歩を教える「スタディースキル入門」や「ユーザインタフェース」などの情報関係の授業を持ちつつ、「デザイン思考」や「経営科学」といった、経営系に近い授業も受け持つ。特にデザイン思考は「顧客の求めているものは何か」を大事にする思考法である。野田（1991）によると、野田氏は開学前から関係者には往復はがきで毎週のように手紙を送ってフィードバックを求め、また、学生評価を実施するなど、消費者の声を大事にしていた。この方法論にも通じるものがあると感じる。

教員という立場になるとさまざまなものの見え方が異なってくる。学生のころは、自分自身しか見えない、まさに視「点」しかなかった。しかし、教員になると、さまざまなものが重なり合い、過去から未来へと考える必要があり、視点では済まず、視「線」が必要となる。学生の「学び」や「成長」「将来」のことを真剣に考えて授業やゼミを運営することが求められ、それが教員の矜持でもある。これと同時に、最新の教育を行うために、自分自身の研究も進め、

また、大学の運営も行うことが求められる。日々学生と対峙しながら、より良い教育とは何かを考えて奮闘している。

6. 経営情報学と変わるもの、変わらないもの

筆者は現在、多摩大学の他の教員と4人で、「イノベーション・エコシステム研究会」という活動を行っている。この活動では、大田区や燕三条などの製造業の経営者に実情を詳しくインタビューしている。創業してから数十年以上生き残る企業をみると、「変化に対応できる」ことが生き残る秘訣と感じる。時代の要請と自らの強みを把握したうえで、その環境に適合することで、したたかに生き残っているように感じる。

大学を卒業してから24年というとおよそ4半世紀である。犬は1年間に人間でいうと7歳分歳を取ることから「ドッグイヤー」ともいわれたIT業界にとって、24年は他の業界では168年にも相当する進化を重ねている。ハードウェアの能力は指数関数的に増大し、ソフトウェアも日々進化している。だが、教える内容もだいぶ変わるかというところではないと感じている。表面的なものは変化しているが、本質は変わらないと考えている。

例えば、平成4年の経営情報論のシラバスを見ると、さすがに個々の事例で扱われている経営に用いられるシステムには古さを感じる。一方で、そこに根付く、どのように情報技術を経営に応用して効率化するのかという本質については、現在も通用すると感じるし、未来にわたってもそうであろう。

経営に情報は不可欠となって久しい。世界初の汎用電子コンピュータであるエニアックが1946年に開発されてから、およそ10年後には、Leavittら(1958)が、「この10年の間に、新しい技術がアメリカのビジネス界に定着し始めている。」とハーバードビジネスレビューで述べている。

論文の中でコンピュータの使われ方として「大量の情報を高速に処理する技術」「意思決定問題への統計的・数学的手法の適用」「高次の思考をコンピュータプログラムでシミュレーション」を挙げており、現在の経営に用いる使い道と変わらないことがわかる。

このように、コンピュータの黎明期から、研究者は様々なことをコンピュータで実現しようとした。もちろん、当時はコンピュータの能力や社会環境により広く普及しなかった技術も多い。例えば、Heilig(1962)らの開発したSensoramaは世界初の仮想現実(VR)装置と言われる。世界初ではあるが、装置は現在広く普及しているVRシステムと遜色ない機能、むしろ現在よりもより踏み込んだ機能を有する。例えば、ステレオカラーディスプレイやステレオオーディオ、匂いの噴出、可動する椅子などから構成されていたという。現在家庭用などに普及しているVRデバイスは、視覚と聴覚がほとんどであることを考えると、嗅覚や触覚へもアプローチしているのは、先進的と言えるが、時代を先取りしすぎており普及には至らなかった。

筆者は、時代は変わってもそこに人間が介する限り、本質は変わらないと考える。目先のテクニックではなく、不変的な知識や応用するために抽象化する能力の獲得が、社会に出て活躍する学生に対する大学教育が行うべきサービスだと思う。しかし、視点しか持ち合わせない学生にそのまま伝えたのでは伝わらない。これらのことにはいかに学生に気が付いてもらえるか、そのためにどのような教育を行うことができるかというのが目下の課題である。

参考文献

- Harold J. Leavitt and Thomas L. Whisler. (1958). "Management in the 1980's", Harvard Business Review.
- M. L. Heilig. Sensorama Simulator, In U.S. PAT. 3,050,870. 1962.
- 朝日新聞. (1996年5月18日). 「就職よさらば 走る学生ベンチャー起業家」. 朝日新聞夕刊. p. 5.
- 小野瀬 拓. (2007). 「ベンチャーブームに関する史的考察」. 九州産業大学経営学会.
- 政府統計の総合窓口 (e-Stat). (n.d.). 「人口推計」. 総務省.
- 総務省. (2019). 「令和元年版情報通信白書」.
- 多摩大学. (1994). 「University BRAND-NEW」. 多摩大学.
- 野田一夫. (1991). 「大学を創る—多摩大学の1000日—」. 紀伊国屋書店.